

大聖堂のある街で



第3話 白い砂浜の少女

堀田耕介

6月の海岸で

それから数カ月が経った。ぼくは毎日、ラプラス通りに通って、お店というお店をのぞいてみたのだが、あの人は見つからなかった。毎日通ううちに、あのマフラーがかっこいいなとか、あの歩き方がいいとか、お洒落な人を見てそれを真似てみたりするのが楽しくなった。えっちゃんに頼んで新しいシャツを縫ってもらったり、お父さんに頼んで新しい靴を買ってもらったりした。ぼくはだんだん、ラプラス通

りに通うこと自体が楽しくなった。そのうちにカフェのちよび髭の店長がカフェラテをおごってくれたり、帽子屋のお姉さんが「売れ残りだから」と素敵
な帽子をくれたりした。コーシー広場でキリヤと話しこんでたらキリヤの親父さんに怒られたり、バイオリンを弾くおじさんの前で座り込んで聞いてたらおじさんがホットドッグをおごってくれたりした。

リカは時々現れてはぼくに付きまとい、不思議な話を吹っかけてはいつの間にかいなくなった。お父さんの仕事はだんだん進み、大きな針や文字盤

が一つ一つ出来て行った。お祭りがあつて、サーカスが来て、月日が過ぎて行った。

その日は学校もお父さんの仕事もお休みだった。しんちゃんとりっちゃんとそのお父さんたちと、みんなでハーシエル海岸に行くことになった。しんちゃんのお父さんのおんぼろ車が大聖堂の前の広場に止まると、ぼくはお父さんとピクニックのかごとパラソルを持って階段を降りた。お弁当はえっちゃんが作ってくれたんだけど、えっちゃんはその日は学校が

あつて、

「つまんないの。」
と言って膨れていた。

「いいさ。」

お父さんは言った。

「今日は男たちだけの海水浴だ。女が一人いるとちよつと気づまりだからな。」

りっちゃんは大きな年寄りの犬を連れてきた。

「アンダー、大人しくしてるんだよ。」

老犬らしく、アンダーは身じろぎもしないでりっ

ちゃんになでられていたが、ときどきくしゃみをした。

「風邪ひいてるのかな？」

とぼくがのぞきこむと、

「だいじょぶだいじょぶ。いつもくしゃみするんだ、こいつ。癖なんじゃないかな。」

りっちゃんのお父さんとしんちゃんのお父さんは大きな釣竿を持っている。

「今日こそは俺の方が大物を上げるぜ。」

「ふふん返り討ちにしてくれる。」

「おれが一番だよ！」

しんちゃんが自分の釣竿を指さして言う。

「頑張れよ。」

ぼくのお父さんはのんびりするのが目的だ。パラソルとビーチベッドを持ってきて、日陰でのんびりしてくるといふ。ぼくはりっちゃんやんと犬と遊べればいい。

車はエマニエル橋を渡って新市街に入り、市庁舎前のロータリーを曲がってラプラス通りに入った。いつも歩く道でも、車で通ると見え方が違う。ぼく

はカフェのおじさんに手を振った。おじさんは眼鏡を持ち上げてぼくを見て、手を振った。

「ユキちゃん！」

声ができるので街路樹の上を見上げると、リカが枝の上に座って手を振っていた。

「何だよ危ないぞー！」

「大丈夫よ。行ってらっしやーい。」

手を振っている。りっちゃんが不思議そうな顔をしてぼくを見た。

「誰に手を振ってるの？」

「ほら、あそこに。」

もう一度見ると誰もいない。

「隠れちゃった。」

「誰かいたかなあ。」

りっちゃんはしきりに首を振った。アンダーが

「ワン！」

と小さな声で吠えた。

ラプラス通りの終点は、海だ。そこを右に曲がると海岸通りになって、湾に沿って北東に走る。お父さんはもう寝ていた。

「お父さんは普段お疲れだからな。」

りっちゃんのお父さんがぼくに話しかけた。

「毎晩時計の部品を磨いているからね。」

「でもすごいな。200年に一度の時計の交換を任されたんだから。」

「お父さんも名誉なことだ、って言ってたよ。」

「そうだよなあ。ずっと名前が残るんだからな。」

しんちゃんのお父さんが運転しながら言った。

やがて街は途切れて、砂浜が見えてきた。堤防の向こうに白い波が立つのが見える。

「キヤツホー！」

しんちゃんか奇声を上げて立ち上がった。

「危ないぞ、しん。この車は屋根がないんだから、よろけたら落っこちるぞ。」

「平気だよ、お父さん。」

助手席で、フロントガラスに手をかけて立ち上がる。

「うお！」

髪の毛が後ろに飛ばされて、声がびりびりになった。

白い家が立ち並ぶ避暑地の別荘街を過ぎて、やがて砂浜の人だかりが見えてきた。駐車場に車を止めると、お父さんたちはパラソルやビーチベッド、バーベキューの道具や釣竿を運び始める。ぼくたちは車の中でシャツとズボンを脱いで水着になると、一目散に海に走りだして、飛び込んだ。アンダーが喜んで水際で跳ねる。

「ちよつとやめろよアンダー！」

しんちゃんが大げさに水をよける。それから三人は水のぶっかけあいだ。太陽がぼくたちを照らし

ている。砂浜にいるみんなを照らしている。若い人も、年をとった人たちも、陽の光を浴びて、海に飛び込んで。みんな夏を楽しんでる。

「おおーい、用意ができたからちよつと集まれー！」
しんちゃんのお父さんが大声でぼくたちを呼ぶ。
「よし、行くぞアンダー！」

ぼくたちは砂浜を駆けあがる。お父さんたちは、砂浜と芝生の境目のあたりにパラソルとビーチベッドと、バーベキュー用の炭火のコンロを置いていた。ゲストハウスも近いし、絶好のポジションだ。りつち

やんのお父さんがテニスの審判員みたいな高い椅子に座っている監視員に声をかけて何か話している。

「お昼ごはんはしんちゃん次第だね。」

ぼくが言おうと、しんちゃんは、

「おお、まかせとけ！」
と胸を張った。

「はっはっはっ、しんが釣れなくてもおじさんたちが何とかしてやるさ。釣れたての魚を炭火焼きにすると言いぞ」

しんちゃんのお父さんが釣竿を点検しながら言

う。

「ひー、じゆるじゆる。」

りっちゃんがよだれを吸う真似をして、みんなが笑った。そこにりっちゃんのお父さんが来て、

「ポイントはあの堤防の向こうだそうだ。けっこう磯の魚が釣れるらしいから、楽しみだな。」
と言う。

準備が済むとりっちゃんのお父さんとしんちゃんとしんちゃんのお父さんは、釣竿を持って堤防の向こうに歩いていった。

「よっ」らせ。」

お父さんはビーチベッドに横になる。

「お父さんは少し休むから、お前たちは遊んでおいで。」

そういうとお父さんはすぐ寝入ってしまった。ぼくとりっちゃんはアンダーと一緒にまた波打ち際に行って、走ったり飛び込んだり泳いだりしているうちにだんだん日が高くなって来た。

「ぼくしんちゃんたち見て来るよ。」

りっちゃんはアンダーを連れて堤防の方に走って

行った。お父さんは寝ている。ぼくは何となく手持無沙汰になってパラソルのところに戻り、自分のズボンのポケットを探った。小銭がある。ぼくはそれを握りしめてアイスクリームを買いにゲストハウスの方に歩いていった。ゲストハウスの前には何人も売りが並んでいて、ピザやホットドッグ、ジュエリートやフィッシュアンドチップスを売っている。ぼくはアイスクリーム売りの前に行って立ちすくんだ。そこにあの人がいた。

あの人はアイスクリームを一つだけ買って、ぼくの

方を振り向いた。白いセパレートの水着に、水色のシャツを羽織っていた。白い帽子に、白いリボンがついていた。

あの人は、ぼくの方を見てにこっと微笑んだ。

「こんにちは。」

ぼくは口の中がからからになったけど、何とか返事をした。

「こんにちは。」

この間より、ずっと明るい口紅だな、と思った。

「この間のごめんね。」

ぼくは緊張で何を考えているのか分からなくなつた。ぼくのことを覚えてくれてる。それだけで胸がどきどきしてしまった。それにスタイルの良さ。すうつと伸びた足にどうしても目が行ってしまふ。胸はあまり大きくないけど、白い水着が眩しい。

「いいえ、こちらこそ、よく見ないで走ってごめんなさい」

と下を向いて言った。

「おうちの人と来てるの？」

ぼくはうなずいた。

「ちよつとお話ししない？」

ぼくは顔に血が上って行くのを感じた。

「でも、あなたも誰かと来てるんでしよう？」

ぼくの頭には、あるとき一緒にいた白いコートの人のことが思い浮かんだ。その人は笑った。

「あなた、ってあなたみたいな子に言われたのは初めてだわ。」

「変ですか？」

「私、カスミっていうの。」

波の音がまるでBGMのように聞こえた。今何が

起こっているのかぼくにはわからなかった。

「カスミちゃん、って呼んで。」

ぼくは思い切って言った。

「ぼくは、ユキです。ユキでいいです。」

カスミは笑った。

「じゃあちよつと、そこの堤防でお話ししましょう。

アイスを買ってあげるわ。」

カスミはもう一つアイスクリームを買うと、ぼくに差し出した。

ぼくたちは海から少し離れた芝生のさらに上の、

コンクリートの堤防の上に座った。ここまで来る人はいない。海からの風が気持ちいい。南西の空に太陽が眩しくて、海はきらきらしていた。遠くで魚が跳ねるのが見えた。そのもつと向こうにぼくたちの街の港から出航して行く大きな船の姿が小さく見えた。

「いいんですか。」

カスミはぼくを見た。ぼくは下を向いて言った。

「一緒に来た人がいるんじゃないの。」

カスミは唇の端にふっと笑みを浮かべて、

「ううん、いいの。ちよつと、けんかしちやつて。」

ぼくは昨日、しんちゃんを取っ組み合いのけんかをしたことを思い出した。もう二人ともそんなこと全然忘れてるんだけど。

「大人の人でもけんかするんですね。」

「大人だからけんかするのよ。」

ぼくは黙った。

「あー、ごめんね、変な話して。」

カスミの横顔が、白い帽子からこぼれて来るように見えた。カスミの向こうに、青い空と、白いカモメ

が群れているのが見えた。

「あのね、私ね。」

すいーっと一羽のカモメがぼくたちのそばに来て羽を休めた。

「こないだ本屋さんの店先であつたとき、あなたのこと、きれいな子だなあつて思ったのよ。なぜかずっと覚えてて。忘れなかつたの。だから本屋さんに行くたびにあなたのこと探したの。でもいなかつたら。偶然ね。こんなところで会うなんて。」

カスミもぼくのことを探していたんだ！ぼくは嬉

しくてどうしたらいいか分からなかった。

「ぼくも探していたんです。毎日、新市街でうろろして。でもラプラス通りはきれいなお店が多くて、ぼくなんか入れないし。本屋さんも何度も行ったんだけど。」

思うように言葉が出ないのがもどかしい。ぼくがどんなに一生懸命にカスミのことを探したのか、いくら言ってもいい足りない気がした。

「そう、よかった。また会えて。」

カスミは帽子を脱ぐと、ぼくの膝の上に乗せた。

「ねえ、約束しない？ 今度の木曜日、午後四時に、あの本屋さんで。」

「いいんですか？」

ぼくは飛び上がりそうになった。

「いいわよ。私、その時間には学校が終わるし。」

ぼくはびつくりした。

「カスミちゃん、学校行ってるの？」

「うん、私、16歳なんだもの」

ぼくは驚いた。

「高校生なの？」

16歳って、えっちゃんより二つも下じゃないか。

「そうね、高校みたいなものかしら。だから今度会うときは、制服よ。」

カスミはいたずらっぽく笑って立ち上がった。見上げると、空が真ん丸な気がした。

「おい、ユキちゃん！」

ぼくを呼ぶ声がした。りっちゃんだ。アンダーが駆け寄って来る。

「私、行くね。約束よ。」

ぼくはカスミに帽子を渡した。

「ありがとう。」

カスミは浜辺の方へ歩いていった。同じ方からりつちやんが駆け寄ってきた。りつちやんはカスミの方をちらつと見て言った。

「知ってる人？」

「うん、ちよつと。」

「みんな、ユキちゃんのこと、探してたよ。」

「ごめん、みんないなくなっちゃったから退屈でさ。」

「それより大漁なんだぜ。おっきい魚いくつも上げてさ。もうみんな食べ始めてるよ。周りの人たちに

もみんな奢って、うちの父ちゃんもしんちゃんのお父さんも周りの人が持って来てくれたビール飲んで上機嫌になっちゃってさ。」

「帰りだれが運転するの？」

「ユキちゃんのお父さん、お酒飲まないって言ったよ。」

「そうか、お父さんか。」

お父さん、大きな仕事の間中はお酒飲まないからな。

「早く行こうぜ。みんな待ってるよ。」

ぼくはカスミの消えた方をもう一度見たけど、もうどこに行ったのか分からなくなっていた。アンダー
が

「ワン！」

と吠えた。

大聖堂のある街で 第3話 6月の海岸で

<http://p.booklog.jp/book/44600>

著者：堀田耕介

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kous37/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/44600>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/44600>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.